今回は千葉県の地域包括支援センターと、中核地域支援センターでのF-SOAIP実践報告です。相談援助の視点の明確化、分野横断的・包括的相談援助において大きな効果を感じています。

千葉県からの発信
地域包括支援センターにおけるF-SOAIP導入の経緯・効果と今後の展望

千葉市あんしんケアセンター磯辺 管理者／主任介護支援専門員　清水直美

1. F-SOAIP導入の経緯とこれまでの取り組み

当初、SOAPで記録していましたが、実践内容を記録するのにやりづらさを感じていました。F-SOAIP開発者の研修に参加させていただき、個人ワークをしたところ、今まで感じていた実践部分と今後のプランを分けて書くことができ、この記録方法が良いと感じました。そこからは、意識してF-SOAIPに分けて（特にIを意識して）記録するようにしました。全てをF-SOAIPで記録してきたわけではないのですが、慣れてくるにつれて徐々に要領を得てきました。しかし、なかなか周囲に広めるところまで行かず、目にした方に聞かれると説明をしてきました。

地域包括支援センターの場合、相談職は何かしら前職で相談業務をおこなっており、教育、実践の場で自分なりの記録方法を習得してきています。そのような方達が、日々多忙な中で記録方法を学び直し、慣れない方法に照らし合わせながら記録をしていくことはとても時間がかかり、多忙に拍車をかけると言われるのもうなずけます。

ケアマネジャーを相談職としてやってきた方の多くは、アセスメントと相談援助が切り離されているように感じることもあります。アセスメントは初回のインテーク時に行う作業、またはケアプランを作成するにあたり、情報をまとめ、分析し課題を抽出するためにまとめる作業と捉えられているように感じることがあります。そのため普段の面接の場面で行われたやりとりがうまく記録や援助に活かしきれていないように思うのです。

2. F-SOAIP導入の効果

まず、自分自身の思考の整理になる点です。また利用者が言ったこと、家族が言ったことを焦点化・明確化しながら聞いていくようになります。支援者である私がどのようなアセスメントをしたのか、そしてどのような介入を行ったのか、その結果どのような反応が得られたのか、次の予定はどうするのかがSOAIを繰り返しながら整理できます。

相談援助中に支援者である私がどのようなアセスメントをしたのかは、振り返って自己点検を行うこともできますし、足りない部分を同僚達に補ってもらうのにも効果があります。

相談援助の視点が分かりやすいことは、事業所内の引き継ぎ場面では、他者の記録を何度も読み込まなくても視点が明確なので私自身もわかりやすいと実感しています。

病院からのサマリーでも、F-SOAIPのタイトルはないものの、この記録方法で書かれたサマリー（例　S：病気のことをわかっているが、まだ自分でできると思っている。O：疾患についての情報、行った治療・処置　A：受け入れがまだできていない様子。今後急激に変化してくると考えられる。I：介護保険の認定だけは今のうちに準備しておこうと勧めて本人が納得したので申請を進める。）を拝見することがあります。この場合Pは、「地域包括支援センターに引き継ぐ」となるのでしょう。この例はシンプルなものですが、このように記載されているものは、単に病状説明の内容や入院中の処置を記載されたものよりも、本人の心のうちが読み取れることもでき、そこに寄り添った対応をされた看護師の援助が伝わってきます。他職種・他機関との情報共有など連携を図る面でも、大変分かりやすく効果があります。

3. 今後の展望

大学でF-SOAIPに取り組んでいるところもあると聞きますが、介護支援専門員や相談職に就く場合は、授業や研修